粉河寺縁起霊験記

椙山女学園大学デジタルライブラリー

椙山女学園大学図書館

平仮名
絵入

粉河寺縁起霊験記

仏菴
画

當山書林

紀州粉河寺千手千眼之図像

沙羅書房
神田神保町 (219)0470

四至伽藍之圖
紀州粉河寺
中門

粉河寺
中山寺
十輪院
十王堂
大師堂
天の川
三ヶ一川
きの川

粉河寺縁起

紀州粉河ちゐ光仁帝寶亀元年にうまれてう
の補陀洛浄土なりとと大士とうりゝとうの霊祐又
このうとにはぎ給へつまうわふさらく浄土はぞん
ぶゆくことゆゝしきうに大悲のわまりこゝろ
浄土とうりてひろく利生とやどうしわたり海さん
とにやや慈眼この地とゐんとゐはしまづ毒蛇の力用
とゝこびゆとうづちて毒の海をとうどり海とうろ
まて瀧級山とうりゐひてぞつ。淫蕃これ山り
大悲の孔子古といつゝおりてぞうをうとぞとぬて

このりとをたづぬるに木の枝よりおちてかとをたと
まいりつるほど大雪をつづくゆえばこころかろくて
さぞのつのまでしの霊たちまちちまでをいんと
れて佛とうらんとうれとおこうて十月ちかの
八日より小堂をとりつくて十一月中の八日ヨリ
わりて大士童男男女のすがたとなりて池中
まうもいて伊氏ゆかりのゆきて一和をこひわの左ひ
このたとのようのさぐくをうんてをしてさす
わくはこをけまいをむとおいて伊氏わやこのぐ
ゆえ三つの和わり佛をなりなむとあり佛を

家ハをを来して学をとりぐひをものなりどうくくと宣て
うちつまをぐんの小堂よりあさて言し宣やう家
七日の間よ仏を作りぐしをあ身ぐ勢くまりあ人ある
べくしたとて小堂にうきこをを法ひ八日とりて曉宣
しかをずつとうるる伊氏ゆくくあんまべ金文等
あのくを年初言月法小あしいまたうはくく
言男人あくのいどぬてよ言の初言と成のすて
でをぐる伊氏大よようこびうう矢とすて仏よ法ひ
報業と仏佛法よ後行無をのちの河内よ住をを
とうる長者ありうう兵ひとうのむとあ言と病と

うけて醫療行届くるにつるすなり。實に大士言語男
の身となんぢ。ぜんの家に入れば、子手だてふとこそ
かれしのつるに病さちあるよいめ。ぜんぜんのあるう賊
雲へを行してなまどもうきのつぐ。ぜんぜんぐまの弁の
常にさけざやのはさる拍拍びものとむをめ。ぐ
くよりうをとるくあるいばくよをこのしよりの
こんばさんくふなどのうり風市村こうんでうを
ぐひまりのへとてうくくをとをぬぐきのとうの
ぜんぜん一家をだしてるのれうりふいうをてとうども
をくくぜんぜん人かりゆきなやうて岩川の流よ

むひんをすまりぬるにおいうよ米形をとりて
入るやうなるのをぐまぜうりとまるへ形河
ぬのるりんとよるうをびて川よそひ林よ入りて
見のるりに一の小堂あり。ぐまるんとあるひ書を
地ぜで堂よいまをでふ日をくまいたるうつうれうん
ぐかりぬ和更てこのぜんのりて来り地よのの
づうぐ大つをてひるのづうぐ。扱ぐ手紙書をおをる
よ。ぐでの書書男めぜんをしあの常にけざや
のはさるとせひぬのれよふをもてをるへを
鏡もなくこの紙書の書と化ていのういきを

すいふくうとなりぬかくておの〳〵出家して本尊(ほんぞん)

をはうく恩を報(ほう)じまつりぬ伴氏が一家ハ世々粉河の

別当(べつたう)となりつかへそのちまハいづれもいよ〳〵あつくたよ

おく帰依して大伴(おほとも)の孔子古(くじこ)ハ家をはこびて金堂(こんだう)を

ほうりみ手(て)のひまごなる女ハ住む(ちうしゆ)とうがちて

礼堂(らいざう)をとゝのへ一千人の尼をおしてく風猛山(かざらきさん)のあらしにかれさ

いのりす霊(ひとき)のごとくまかせなひとゝまよりて堂塔房(だうたふぼう)

舎(じや)それより次第に栄へしさ海(かい)云(うん)衆(しう)よりも度(ど)々さ

し抑(そもそも)あらしくは縁起(えんぎ)并ニ霊験記(れいげんき)よりのぼを侍りぬ

抑(そも)池(いけ)池(いけ)有岸(うがん)浪(らう)童男(どうなん)行者(ぎやうじや)縁起(えんぎ)

往昔(そのかみ)観自在(くわんじざい)神力(じんりき)をもて南海(なんかい)をさぐりて山をうつし

すゝる此池中(えいり)に涌(わき)出ます宝亀(ほうき)のはじめ十月の

童男行者おのれもちとあかりて此池のうちよりわきいで

出のなかにうつり生身(しやうじん)観音(くわんおん)と此池とハ名付(なづけ)いり

示(じ)と大悲(だいひ)とあらはれ苦物(ちやうぶつ)かゝし海中よりハ出現(しゆつげん)なし

経(をさめ)て広(くわう)恵(ゑ)果(くわ)の流(る)生(しやう)を救(すく)ふ則(すなはち)法(ほう)有(う)孤(こ)独(どく)の霊(れい)

験(げん)ありとよりて法(ほう)有(う)のちからもさらに済(さい)度(ど)ハ棒(ぼう)云(うん)の

中(ちう)よ浄(じやう)土(ど)をさしてたなり女(にょ)児(じ)霊(れい)場(ぢやう)也(なり)或(あるい)は棒(ぼう)霊(れい)碑(ひ)

文(もん)をもつて中(ちう)将(じやう)かゝりて結(けち)縁(えん)を繰(くり)てまつりたまふぞんハ

寿老男形の観音かく志男の所製作かくなさしむれ
そのうこ世俗よりひそかに粉河のなきるは志男観音に
つかふ浄土ふかくあはれしゆゑてこうかな歎襄しめける
にしまれ給ふ。寿かの主へはこうれなおふくねしこと遺なる
ものとよろて大悲やひしてくと伝まれど、ままへるよの
精よまてひかひつきびあつと讃してひさぐして寿老男大
士の像とはくべにあらまをわがおぐしのなごすなまりとして
出現地よわんらしまへつとかんなる人家極の流つるや
なるべしよろこく鏡の雲晴て結て尊く絶と
ごとくくろ尊のいまふあまる○く利生をかどとう

のかすひぐ此等像よあり世くてりうく志男の
月ハそのかくれし寿老男ら化の済も頼とんのあと
ふごうくかんまりとといども末世乃さあよのこうかへ
おる容ハなくたゆ丈のまあことなをてのびこ常
ぞ生るの観音利生方便のほさせられ済ひて得まし
べきなてそるひまのへしゆくぬあうの、との八粉河の
みなりとなりとてちれ地よあふかく次に金堂と称し
存らうる後とふゆへありぞえうり月のあふつまつる
二つあうしもしハ観音利寿老男と化しし寿老男まさに
観音小除ら観音まさ寿老男と作らく本迹不思

後一の沙弥とんせのつり因果と撥ひ邪ゑんの毒はづ
めるものもと十界性具の妙門に入ぬべし。十方に分と
雖も一系とひろめ給へ。ちすぐさはらくの利生
の世に遍し。親鸞の撥ふるゆえ善と悪の分なり
ひまでひとりとなくの利生をあつかうべし。悪人
善男身得度者即現童男身而為説法とあつる
ぬ理の金文ひきうけさて本仏氏八幡こらとひ
西海の月とあがめ出るの女八幡の雲晴て九品の蓮
おのがりうえ生中おのおの方よりめぐりくるりとて接
て紅蓮のもろもろ天よりやかし給ひ給はは猶ここのうち

釈阿弥陀仏を知らぐ〜して西方ふいさかひ又八苦出ちふ日海
し本師とおもへ世界の仏物とう老三祈の像と安く
兵仏のいと所くおまてのうとくらいのつしるしそ
のち法華法の位持ゆゑて伴の善男の善像と日
る新ゆゑ法里界の善に至なり釈阿ようんなたが
そ仏そ像とうたりゆせひそうて入寂ようしにゆゑ
りのなり。文明九三年正月九三月の秋そうさるふ
善男大士の慶乃内うち夫たうて仏さうし像ハ
焼うせぬ位ほとであ一山の大衆ゆゑひとなりてご
くとゆたもしほどたさあくのうちさ寂寥ゆどうて

こまこれそりかひはこの里のうむくまうてゆくび
堂ふあ玉しなうぬ今のそる像をなり。三百三十
三ちの数とくくこそてなたふ還りのつるすこそ
ぬくびや。世義をせよゆうとしいくるそる像修改
こうしなふわくなうた修信男女てひも垂ことと
ふこそんとむすぶものハ二世乃宝益ひかくし
かそるお祝の日なんばくてとふうしまとの十一月八日
御性と養こ利物をゆうとれ

粉河寺霊験記

○清和帝御悩のれ時治とうけ祝言れはおうて

書つ水七万まうと後巻数とようしに仏悩魚ようぬ
ようて別当思かう法橋ようのぐれくれくようのぐうふ
屋田の益雄といつものこうごろ遣ぬうて宇治
橋の月とうふて玉女と共ちんとうろ玉女ようを
ぬぐうとのうて一心ようん号と称ふ一橋ところ打言
かうろようる風れうろ玉霊かはひてかいとうけど祝
益雄ハとうとうひかりひくく玉ぬと父ようの契ひを
ぬうようとくの起てようくの龍ようをうしひうう浪
ようようの後のくまうるれわうびや
○業平朝臣の小方りうて粉河の祝言と共て毎日

蕎麦粉二十三本とりこぬ清水のれ時殿上人祈物と
立上て　なりうるもてしたかねの花月の才は寅て賊英
しとて　者男も　樋二三合は立文とそくく紀列粉
河ちうりのれ使なりとて拵手りぬ小方大は抗ひ紀の
穂と者代た扇ふかけ条こ　ぬ　紀者を用てうふ孫果へやそ
立上にたりにこ色人男の味は姫とてれ感者ち
ど　そ　卯月上のうちう小方と作の曲ちれ
紀者とぬ　なりくさう別曲悲は者るはゆ
ど　時は鶴の平うう更者量でうりぬ悲へ
てれ性とかぐるは者るのたのれ扇ふ紀乃穂とけ

れてしぬとあやしうてあんるにあるしふたり
ふたりて者まるにけまのくせしく穂なりとさ板生中
ぬ小者ぬとぬこ者りし紀は紀とづくる者と
うりうぬはよれあり
○伊勢郡戸立とりこうの田とうむさしく大
土うちと化して苅とりあ或の秋とう紀稲
稲二把とうとあるて紀者量の関係ふ入つる
とふつうこん紀とうてひ者りてちくこうつくこ者るは
者るものあり　こうん者るこ細とうこ成りくこうて
ちりあうう　者のはうれのうこさ稲出くこ成生性

金ゝして後なさゞれふ月ゝ若とうく四のさ
ほと新とうてこ年中の人民をゆさんたゞ四ん
ゞたあたりもとく此國たることゆさわてしかい
るゞ力なりと言ゝゆあさわて流とうゆうり
出ろうゞ此年ゝろうと秋して杉の田とん付ること
ゝと濃厚生るえのひとあはんあゞゝ月くゝく
耳ゝたいくゝのゝとゞゞ父母ろういて法梅ちに
ろう行ゝちるゝ杉河ちはゝ多の知せるゝ行
なりゞゞとゝ花若ろうろうく父母ゝ三人山寺に
まゝゞく一心ゝ行精しなろゝ多ふ病年生活とん

いろを信ゝとなりて和のひはひとわ宿世て
父母ゝ不ななゝゝ業力強ゝんろうとなりゝく
勤ろ和の病ゝ生ゝ指ゝゞゞうゝと若ろひうた
ゝ機感ろうさゝ宣業ともろさうく指ゝの
供ゝ生ゝさひゝや知ゝの病ゝぬ為え教ろうゝ養
ゝとろゝれ感清ゝゞて放ゝるゝと家と賜ゝうゝ記
○紀伊ち名浦のひとあハんあ海世ゝろゝびなり
若ろゝて後いゝあゝゝとゝ生ひ○病て賢療行
行ゝとふゝゝゝ別儀ろゝひ山ちゝてろうく
行ゝゝ生ゝ長ふ海ゝの女ハ教生の病怒ゝろ毒快と

さらめり三聚戒と持らせんといへねがひしとて授かへり
胡蘆大きに悦び御手に取りて女にむかひ三聚とならべく
帰依仏 帰依法 帰依僧と三度となふべしと申給ひ
終りければ書班として同所の毒池の六七寸ごろ
なりとちかひて宿病忽ちにいへねくて胡蘆和尚に
とありて西陽とてしみ十月の影を仏の荘厳
あとも親方より故縁にて観音は来迎前月安置せし
〇同所湯浅住人前京宗永当国の観音と信じたる
世よめでしき八まん様の事しとなる号のつけかうわて
此堂の跡の方へ移載てこれを湯浅様といへり

宗永は出家して観興と号して九十三にて往生しぬ。
この縁今にそんじてありとなり
〇前京成後の家とりのひとあげれ前からの故因として
母にそつかれていても此の観音を信じて七つ凡の時
女とむさふを出てなく
民雅集 尺蠖戸 ▲ゆぐらくれ此のおれや前かる椎かなれどこの山のあとば
終へとそれりて縁して そうしてきどろとげるゆあるよ
未 ▲藤の花と深くとふたる縁出く
ふじてくれ此の山へ深由ろうりのあかれどもみなあるもきよ
おしろいぬぐひとみへつけていや花のゆめのゆかれさねさて

むとの佛あの物所とろうけて母よりてん
又母なるごとくむとひてトかしてう
○紀伊の宰吏云雲ハ海大なる大だの物なり
雲目の威よりて代の物所をむさ彩河る
紀伊ハ村と犯しあやまれよ結ち船生大明神
大よりとりとあり。ろく大だ及さの沈ごと
かけ先除乃廳宣とトしあり文ハ栗栖院
と云て代と大樓形となり給ひ
○法五尼書堂いりと船のとれすて大根海流ぬ
はくしおかぐりおろ〜報恩と作して彩河う

とあり。陸くこ云ふ廳ことあれ方ともこめて大般
若經寶入幢懐堂法華經佛具ハ主と寄附して勲功
あつきものなり惣よ報恩と為をなつ法華堂と
なりかたんと思てこれ紀よ為り七日をうぶりハ
堂ハこうりむじよりの者とたてて彩樓とゆわよ
関ばうり廳ごとの紀伊のとごとなりておのれ
れたうしあとこのいてくに移ぐくいな勇とれぐもせ
のとてよちとうりあぐうり幻の中に関ばうり
金文未發の堂元を行いぐ見ぐうぐ主の寄へ
といハ法五尼とよとうり吳書長かをこてさしど

さてそなへ奉るとき一人の婦人と云へる観音の
来迎かうづり給ふ事ありてはなはだしく
罪障の消滅してうくるとせといへども
乃ち仏法をの志とおもひ給ひぬ
応長なりといへども厭悪女身と大誓願を
浄土とねがひ給ふ法の女人のかたちは
○後京極殿の歌書の人号の色とうべき
縁にでしうるわるとなりとやまひとうけしにゆゑ
を信の業と法つるあり粉河寺にて
学ぶの中とんろふ麻よのでく作る業七粒ろ

ようろとびていそぐ服しろふかたちあるのゆゑ
ある業ろうれ業の一粒ありしと稼の縁にて繋ぎて
粉中にとりとるとり、粉業の中ろり小さき事
生ぬ生ぬ事のとまでうくれ為して出る方ろう
事を云へとひけさせのひく、生成の田地の広下
と法りて後学ねば生ぬ、せの代ぬ事ありろ強
○別当延養なるとも、きを粉とたんとい
家の細とろりこでりに延養なりとうとも
物人せどとるの為ぬ為ぬ人公子かろ
仏性のおよ魂ささといしてるを所へ

しゆとといひて、こゝに海をまつ入ぬ義をもして、はやくの
のはなとあるゆへ法華とうえて、義空諸のおしへ
法花三昧とまうして六根相とわるひ法花とまうして
門場とまいりのとき法相のうふなり西ふ
四ひとる詳ふ点仏して寂を経信のとふ法華をたゞ
ひさ阿弥ようやさ伝をたるこゝ
○祿ことわざりの大石座を易祿のでしなり修
験の盛ふ法とうて現ふ幸位よのがんといふのでこ
おこうて粉河ちの目なを安奴の歌言なうこそ行信
ケるゆゆふ幸ひこうして現ふるのこゝ仏十意義

とたりちゆゝらいた小回の主となしぬゝとわり
祿こ中ふく大悪の死むれるよ仏ゝと
量ふかこて
▲かくゝりとげしたいきりのふ編のそふ入て
しをさけとさつけふろくんとわくくあ大系山よ
ちりこ時の三種とこげちゝ正こよ法をしろう
○寿元上人ふ東大ち源元信西のでしなり粉河を
ちんゝてなを寺の東ふよ寺とうてふ手とあんち
さくるこの中ろ二尺八寸の唐櫃とは出ぬを
お仏のこ仏ゝ加護とむとゝ

ちゝしやとゝりやしかりて種とうみ死と作業し
三十余年をとるとして後濁度に沈して後りよりと
○まふこと法師いとゝめ紀伊国牟婁郡小中村一国
就書ゆうこゝ教化行のあゝ海をいのりゆゑに
閻浮提の書深の衣とさゝら給いそ
後人遺文
▲死衣はゝさゝ山よりくゝる糸の泥の月と深
よ。風猫山い粉河なり。ぢさふ東別所より。紙光
上人よりゝく志ととけ。戒などうけまつり。のちお墓ふ
のりとゝるて西武蔵かうゝ又家州北村のさい
紀ぬ和深のゝ史十月十日寂上の往生とうけまつり

○平安院の僧西の深基恵の具なりと尚ちの霊
魂とゝるひゝりこゝは僧西となり法勢院のゝり
三井の出家を捕し宣明の書首とゝり。数ゝ
さてゝゝび尚ちゝるでもさゝゝ沒まと行ゝ
ゆゝふ破地獄文宣はまとゝ云ゝとゝゝ弟ゝ言て
此七字とゝゝしゝゝもゝゝふ仕捕し浄業とゝゝ
保延のゝゝめ二月十八日の孫地仏ゝゝひたのゝ
ふゝゝ西の糸とゝゝ大のゝゝゝ貼とゝゝゝと佛ゝ
うけ口ふゝるゝ名号とゝゝゝ往生し法ゝゝるゝゝ
○云年八三井のゝ尚なり。然既ゝゝゝゝゝゝの出

おいて滌除忍といふのゆゑに粉河のうち男欽
喜に行くへしといつけたまうそ當るにまうづく
同月十八日より法華を講して往生といのる七月
十八日の寅刻ばかりに為無生源を定むる信阿陀
らむ　法華即我身　我亦極楽主
汝讃歎於我　我来迎於汝
とのたまふに志めしまへりさめて涙にむせびて下向
しぬ〇こゝまでて十六日の往生と知しぐなさに後世
十八日の来迎とまちてむかまつしに欽喜とねんごろ
承安三年〇同月廿八日八十二まで かくのごとく往生

とゞけまつりぬるに阿弥陀法に欽喜は三宝への名と
みて一旅なりしも此男の前生と因縁ふかし
ゆゑを信してもさ大宅と横ぬ志く浄土にまれ
阿弥陀の本尊頼ひわたし今日わがうへにて霊告
まさしうちのたうしなんで信ぜんばすべからず
〇古昔の大信正八三井の貴首粉河の要文あり
欽喜を信し一夜の夢とつけしを滌除忍十三
法螺といふりつゝ汚れえ〇宝下ともまこび
懺悔のよと去るしあ鮮として寐を後に在護
境の三や丈六千手観音并二十八部衆の像を安して

ものをたてらしめしかりをもて師の恩をむくひたてまつる
○宗門あさりいふ所は山の指掌なり釈尊を仏
大般若をもつて書ちんぜんの文殊堂の荘厳とさへ
わたりて東の墻上にして仏書法と称し玉ふ仏の
をごそといのりまもりぬなりれ奏すて
振旦敬鶴学人阿〻臨兎学校般若仏経侍兎と称ス
ふきうめなかよる頃三宝の切法を乞ひなく事の永
二を除法正とふよ事とむまび神咒を唱し法を
ひらき也釈尊敬鶴学人の引指ふかれるものあり